

金工家・海野建夫の研究

石黒 美男*

A Study on the Metalworker Takeo UNNO

Yoshio ISHIGURO

要旨 筆者は、江戸時代後期から昭和50年代に至る長期間に渡って家業を継承・発展させた金工家・海野一族について研究を続けているが、本稿では、昭和期に活躍した海野建夫（1905〈明治38〉年～1982〈昭和57〉年）を取り上げた。具体的には、まず、年譜を作成することにより、彼は帝展～新文展～日展を中心に精力的に作品を発表すると共に、さまざまな要職に就き、日本工芸界の指導的な役割を果たしたことが確認された。次に、多様な作品の発掘を通して、彼は伝統的な金工技術を基礎に置きながら、現代の生活様式を意識した作品、打ち出しレリーフに鍍金と箔彩を施した叙情性豊かな作品、鍛金や鍍金の技法を駆使した作品、公共空間に設置する巨大な作品を手掛ける等、幅広い創作を展開したことが分かった。続いて、オリンピック・ローマ大会芸術視察員や茨城工芸会・茨城県展～茨城県芸術祭美術展覧会での活動を調査することにより、彼が日本の古今の芸術を国内外に広く紹介すると共に、地域の芸術振興に尽力したことが明らかとなった。最後に、彼の落款を集成することにより、作品の真贋を見分ける際の一助とした。本研究を通して、改めて現代の工芸作家として表現の独自性を探究することの重要性を認識した。

キーワード：海野建夫 金属工芸 彫金 鍛金 鍍金

I はじめに

筆者は、江戸時代後期から昭和50年代に至る長期間に渡って家業を継承・発展させた金工家・海野一族（図1）について、調査を続けている。

本稿では、2代海野美盛（1864〈元治1〉年～1919〈大正8〉年）の3男・海野建夫（1905〈明治38〉年～1982〈昭和57〉年）に焦点を当てる。

具体的には、まず、年譜を作成することにより、彼の事績を詳らかにする。次に、さまざまな作品を発掘することにより、彼の表現の特色について検証する。続いて、オリンピック・ローマ大会芸術視察員や茨城工芸会・茨城県展～茨城県芸術祭美術展覧会での活動を調査することにより、

彼が尽力した芸術振興の取り組みを明らかにする。そして最後に、彼の作品の真贋を見分ける際の助となる落款を集成する。

本研究を通して、現代の工芸作家として重要な表現の独自性について探りたいと考える。

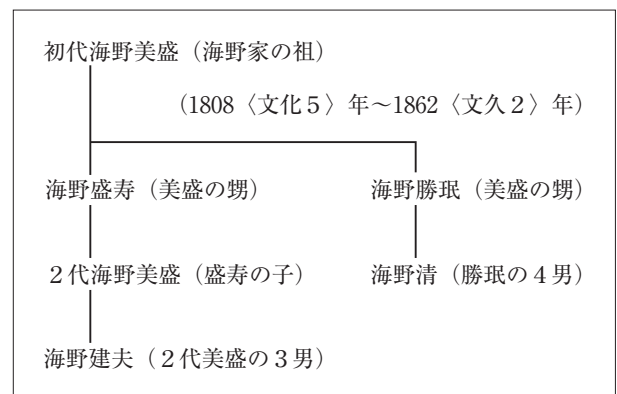


図1 海野家系図

* いしぐろ よしお 文教大学教育学部学校教育課程美術専修

Ⅱ 年譜

1905（明治38）年（0歳） 6月15日、2代海野美盛の3男として東京府東京市に生まれる。

1919（大正8）年（14歳） 大和絵の吉川霊華（1875〈明治8〉年～1929〈昭和4〉年）に就いて日本画を学ぶ。

1928（昭和3）年（23歳） 東京美術学校金工科彫金部を卒業する。美校では、海野勝珉（1844〈天保15〉年～1915〈大正4〉年）の4男・海野清（1884〈明治17〉年～1956〈昭和31〉年）と勝珉の高弟・清水亀蔵（号・南山、1875〈明治8〉年～1948〈昭和23〉年）に師事する。また、2代美盛の弟子・磯崎美亜（1883〈明治16〉年～1942〈昭和17〉年）に就いて父の彫金秘伝を継承する。

1929（昭和4）年（24歳） 第10回帝展に「彫金花盛器」を出品し、初入選となる。

1930（昭和5）年（25歳） 茨城工芸会の設立に参画し、会員となる。（※初代会長：板谷波山〈1872〔明治5〕年～1963〔昭和38〕年〕）第11回帝展に「彫金飾銅屏」を出品する。

1931（昭和6）年（26歳） 東京美術学校研究科を修了する。第12回帝展に「櫃」を出品する。

1932（昭和7）年（27歳） 第2回茨城工芸展覧会に中国古銅器博山爐を現代化した「山水爐」を出品し、県賞を受賞する。第13回帝展に「鉄製ファイヤースクリン」を出品し、特選となる。

1933（昭和8）年（28歳） 第14回帝展に「彫金壁掛」を出品する。

1934（昭和9）年（29歳） 第15回帝展に「鉄布目象嵌相駿ノ図小筥」を出品する。

1936（昭和11）年（31歳） 第1回改組帝展に「鷺九筥」を出品する。文展鑑査展に「蛾花瓶」を出品する。文展招待展に「蛾花瓶」を出品する。

1937（昭和12）年（32歳） パリ万国博覧会に「秋手鏡」を出品し、銀賞を受賞する。4月、吉田醇一郎（漆芸家、1898〈明治31〉年～1969〈昭和44〉年）・宮之原謙（陶芸家、1898〈明治31〉年～1977〈昭和52〉年）・香取正彦（鋳金家、

1899〈明治32〉年～1988〈昭和63〉年）・各務鑛三（硝子工芸家、1896〈明治29〉年～1985〈昭和60〉年）・田村泰二（彫金家、1903〈明治36〉年～1949〈昭和24〉年）・板谷梅樹（モザイク作家、1907〈明治40〉年～1963〈昭和38〉年）と共に旧帝展系工芸の新人グループ「六色会」を結成し、「六色会工芸展」（資生堂ギャラリー〈東京・銀座〉）を開催する。

1939（昭和14）年（34歳） 第3回新文展に「四分一香炉」を無鑑査出品する。

1940（昭和15）年（35歳） 紀元2600年奉祝展に「銀蓬莱花瓶」を出品する。

1943（昭和18）年（38歳） 第6回新文展に「独立・四分一硯屏」を無鑑査出品する。

1946（昭和21）年（41歳） 第1回日展に「煙火箱」を出品する。第2回日展に「文箱・海」を出品する。

1947（昭和22）年（42歳） 第3回日展に「蟹文角皿」を出品する。

1949（昭和24）年（44歳） 第5回日展で審査員を務め、「金工双酸花盛器」を出品する。

1950（昭和25）年（45歳） 第6回日展に「金工洋酒瓶」を依嘱出品する。

1951（昭和26）年（46歳） 東京学芸大学講師となる。第7回日展に「大皿」を依嘱出品する。

1952（昭和27）年（47歳） 東京学芸大学教授となる。第8回日展に「黒味銅壺」を依嘱出品する。

1954（昭和29）年（49歳） 第10回日展で審査員を務め、「赤銅花器」を出品する。

1955（昭和30）年（50歳） 光風会会員となる。第11回日展に「魚文花器」を依嘱出品する。

1956（昭和31）年（51歳） 光風会評議員となる。第12回日展に「鳥文花器」を依嘱出品する。

1957（昭和32）年（52歳） 第13回日展に「楽園・花器」を依嘱出品する。

1958（昭和33）年（53歳） 彫金・鍛金を主体とする日本金工作家協会を結成する。日展会員と

なり、第1回社団法人日展に「ある壁画へ・メデューサ」を出品する。

1959（昭和34）年（54歳） 第2回社団法人日展で審査員を務め、「八乳花器」を出品する。

1960（昭和35）年（55歳） 日本体育協会のオリンピック・ローマ大会芸術視察員として渡欧する。

1961（昭和36）年（56歳） 日展評議員となり、第4回社団法人日展に「裏街」を出品する。現代工芸美術家協会委員となる。

1962（昭和37）年（57歳） 第5回社団法人日展に「谷底の天国」を出品する。

1963（昭和38）年（58歳） 第6回社団法人日展で審査員を務め、「丘の洞」を出品する。

1964（昭和39）年（59歳） 東京オリンピック大会芸術特別委員会幹事となる。第7回社団法人日展に「見附」を出品する。

1965（昭和40）年（60歳） 第4回日本現代工芸美術展で審査員を務める。第8回社団法人日展に「翼のある花器」を出品する。

1966（昭和41）年（61歳） 現代工芸美術家協会参与となる。第9回社団法人日展に「白馬家族」（茨城県近代美術館蔵）を出品する。

1967（昭和42）年（62歳） 第10回社団法人日展に「春想」を出品し、内閣総理大臣賞を受賞する。

1968（昭和43）年（63歳） 第11回社団法人日展で審査員を務め、「合戦」を出品する。

1969（昭和44）年（64歳） 第8回日本現代工芸美術展で審査員を務める。東京学芸大学を定年退官し、名誉教授となる。光風会理事となる。

1970（昭和45）年（65歳） 前年の第1回改組日展に出品した「雨もよい」（日本芸術院蔵）で、昭和44年度第26回日本芸術院賞を受賞する。いはらき賞を受賞する。

1973（昭和48）年（68歳） 日展理事となり、第5回改組日展で審査員を務め、「求道」（東京都現代美術館蔵）を出品する。茨城工芸会第3代会長となる。茨城文化賞を受賞する。

1974（昭和49）年（69歳） 三橋国民（1920〈大正9〉年～2018〈平成30〉年）・越智健三（1929〈昭和4〉年～1981〈昭和56〉年）・川添智利（建築家、1929〈昭和4〉年～1999〈平成11〉年）と共に制作した「燦」が、山陽新幹線福山駅に設置される（日本鋼管寄贈）。第6回改組日展に「白い梟」を出品する。

1975（昭和50）年（70歳） 勲3等瑞宝章を受章する。第7回改組日展に「洋犬」を出品する。

1976（昭和51）年（71歳） 第8回改組日展で審査員を務め、「曲馬」を出品する。

1977（昭和52）年（72歳） 第9回改組日展に「孤高」を出品する。

1978（昭和53）年（73歳） 日展参事となり、第10回改組日展に「虞美人草」を出品する。現代工芸美術家協会を退会し、日本新工芸家連盟代表委員となる。

1979（昭和54）年（74歳） 第11回改組日展に「白雉不動」を出品する。

1980（昭和55）年（75歳） 三橋国民・越智健三と共に制作した「鳥の詩」が、三重県津市役所に設置される（日本鋼管寄贈）。

1981（昭和56）年（76歳） 第13回改組日展に「初霜」を出品する。

1982（昭和57）年（77歳） 第14回改組日展に「白鳥座・盤」（常陽銀行蔵）を出品する。11月17日午前0時、心筋梗塞のため東京都杉並区の自宅で死去する。没後、正5位に叙せられる。

以上、年譜を編むことにより、彼は帝展～新文展～日展を中心に精力的に作品を発表すると共に、日本工芸界の指導的な役割を果たしたことが確認された。

Ⅲ 作品に見る表現の特色

建夫の父・2代美盛は、主に人物や動物を丸彫で写實的に表現したが、建夫は、伝統技術に立脚しつつ、現代の生活空間と調和した工芸を指向して、研究を重ねた。

本章では、具体的な作品を通して、彼の表現の特色を探る。

1 伝統技法

(1) 片切彫

片切彫は、鑿の先端を一方に倒して彫ることにより、片側が深く、反対側が浅くなる線彫技法である。日本画の「付立画法」の筆勢を表現することができ、勝珉や2代美盛が得意とした。

①「不二越の龍」(図2・図3)

本作は、扇面形の銅板を素材とし、仕上げとして全体に銀メッキが施されている。建夫の片切彫は、線の幅や深淺が変化に富んでおり、各モチーフに迫力が感じられる。



図2 「不二越の龍」縦21.5cm, 横45.5cm 個人蔵



図3 「同」部分

(2) 毛彫

毛彫は、金属面に鑿で連続した凹線の文様を彫り込む技法である。古くは弥生時代の銅鐸等に見られ、清が多用した。

①「鴨 額面」(図4・図5)

本作は、銅板を素材とし、一部に金メッキと銀メッキが施されている。本作では、鴨の羽軸にこの技法が用いられており、刻線は流麗である。



図4 「鴨 額面」縦23.5cm, 横39.4cm 個人蔵



図5 「同」部分

2 独自の作風

1929(昭和4)年、建夫は、帝展に初入選を果たし、金工家としてのスタートを切ったが、その

時に出品された「彫金花盛器」は古典的なものであった。しかし、1932（昭和7）年の帝展で特選となった「鉄製ファイヤースクリン」は全く新しい傾向の作品であり、鉄でフレームを作り、その中に鉄鎖を繋ぎ合わせた四角形の網を6枚下げ、それぞれに花と鳥の銀の打ち出し金具を取り付けたものであった。新しい建築様式と調和した工芸へと転換した意図は斬新であり、花器・香炉・金具等の小物に精緻な技を競っていた当時の彫金界に波紋を投じた。これには、兄・海野浩太郎（1893〈明治26〉年～1946〈昭和21〉年）が建築家であったことも影響していると思われる。

そして、1960（昭和35）年の訪欧を契機として、建夫の作風は一変する。

（1）「裏街 フィレンツェにて」（図6・図7）

本作は、銅板を素材とした打ち出しによるレリーフであり、仕上げに金メッキ・銀メッキ等が施されている。

ところで、この作品と類似した構図の「裏街」（縦140.0cm、横65.0cm）と題された作品が、1961（昭和36）年の第4回社団法人日展に出品された。その制作方法は、以下の通りである。

この額は下絵がきまると、一枚の大きな銅板に下絵を裏返しに描き、たんねんに鑿を打ち込んでゆく、裏からこのようにへこませていくと、表には柔かみのある線が凸に打出される。太い鑿で強く打出せば太くたくましい線が表にあらわれる。細い鑿で軽く打てば繊細な線が打出される。このように、裏からの打出しかたで、表の表情はいろいろと変る。しかし松脂で板台に密着させているので途中では表を見ることができない。作家は表面を想定しながら逆に裏から鑿を打込んでいく、版画を彫るときと同じ仕事だ。出来上つて、板台からはずすと、はじめて、表側を見ることができが、この瞬間にはいつでも或る種の緊張感と喜びを感じるという。版画の初めの刷りと同じ気持であろう。良いとなると、一部分を金メッキしたり緑青をつけたり色わけをして完成する。¹⁾

日展出品作と同様の工程で制作された本作の、メッキが施された箇所注目すると、その厚みは一定でなく、一見銀色に見える部分も所々に金が重ねられており、彼の色彩に対する優れた感覚を確認することができる。（図7）

その後、建夫は新しい素材美の研究を進展させ、「箔押しについて」、日本金工作家協会編、『彫金・鍛金の技法Ⅱ』、1970（昭和45）年、62頁～63頁で、「箔の厚薄によるトーンによって色金の対比だけでは出せない「色の感情」が作れる様に思えて以来その試作を続けて居る。」と述べている。

長年に渡る研鑽の結果、彼は1970（昭和45）年に、前年の第1回改組日展に出品した「雨もよい」で、昭和44年度第26回日本芸術院賞を受賞した。推薦理由は、下記の通りである。

氏は水戸派金工の伝統技術を近代解釈によって駆使し、新しい金工の創造に努力を重ね、多年、金属の表面を研究して、在来の鍍金法と水銀箔とによる階調に独自の新機軸を開拓した。この作品は、銅板に打ち出しの手法を用い、大王松の斜交文に単純化した鷺を配し、静寂な中に重厚な構成を示したもので、各部分におけるたがねの変化に細心の神経を用い、金属独自の効果を強調し、鍍金と箔彩による柔かい色調により、工芸独特の装飾的效果をあげた優作であると認める。²⁾

そこでは、鍍金と水銀箔による叙情性豊かな表現が高く評価されている。



図6 「裏街 フィレンツェにて」縦43.0cm, 横27.5cm
1964(昭和39)年 個人蔵



図7 「同」部分

続いて、同様の技法を用いて制作された作品を3点紹介する。

(2)「昼月」(図8)

本作は、松の幹を突いて穴を開ける1羽の啄木鳥に薄らと浮かび上がる月を重ねることにより、幻想的に表現されている。

なお、ほぼ同構図の同名作品(縦33.0cm, 横23.0cm)が、現代彫金・鍛金美術展—15周年記念—(日本金工作家協会主催, 東京展〈日本橋高島屋6階美術画廊〉: 1975〈昭和50〉年8月28日~9月2日/大阪展〈灘波高島屋5階美術画廊〉: 同年9月4日~9日)に出品されたことから、本作も同時期に制作されたと思われる。



図8 「昼月」縦40.0cm, 横31.0cm
1975(昭和50)年頃 個人蔵

(3)「神農」(図9)

本作は、中国古伝説中の帝王である神農をモチーフとしたものである。彼は、百草を嘗めて薬草を見分け、医薬の道を開いたとされる。通常、人身牛首の風貌と鋭い眼差して表現されるが、建夫の作品では、「菩薩半跏思惟像」(奈良・中宮寺

蔵)のように静かに微笑んでいる。



図9 「神農」縦56.0cm, 横40.0cm 個人蔵

(4) 「黒いパンジー」(図10)

クロスを敷いたテーブルに沢山のパンジーが生けられた器が置かれている。花卉には赤銅箔彩が施されている。



図10 「黒いパンジー」縦24.0cm, 横34.0cm 個人蔵

3 装身具・調度品

建夫は、前述のような鑑賞用の平面作品の他に、アクセサリーや器物といった暮らしの品々を制作した。

(1) 「葡萄狩 鏡」(図11)

本作は、携帯用の鏡である。

最初期の作品であり、1人のニンフがワインの原料となる葡萄を収穫している様子が、アール・ヌーヴォー様式で打ち出されている。向かって右側には壺、左側には鹿らしい動物が配されている。素材には銅板が用いられ、仕上げとして緑青が施されている。



図11 「葡萄狩 鏡」縦9.1cm, 横9.1cm
1929(昭和4)年 個人蔵

(2)「黄金虫 鉸」(図12)

本作は、銀を素材とした帯留である。

半円形の中に、打ち出しによるスカラベと草花が、アール・ヌーヴォー様式で表現されている。スカラベは、古代エジプトにおいて聖なる甲虫として崇拝された。仕上げには、金メッキが施されている。



図12 「黄金虫 鉸」縦3.7cm, 横5.7cm
1936 (昭和11) 年 個人蔵

(3)「蟬 美鉸」(図13)

本作は、銀製のバックルである。

蟬の左右には、4つの小さな円による文様が規則的に配置されており、アール・ヌーヴォー様式とアール・デコ様式が取り合わされている。



図13 「蟬 美鉸」縦3.7cm, 横4.6cm 個人蔵

(4)「竹文鉸」(図14)

銀を素材とした帯留である。団扇形の枠の中に

竹が彫り込まれており、背景は格子模様となっている。葉脈が細かく表現されており、仕上げとして金メッキが施されている。



図14 「竹文鉸」縦2.5cm, 横4.0cm 個人蔵

(5)「蛾文 鉢」(図15)

本作は、内側の中央に羽根を広げた1匹の蛾が金色に輝く銀製の鉢であり、四方には金彩・銀彩によるドクダミの花が配されている。シンプルなデザインであるが、インパクトがある。



図15 「蛾文 鉢」縦29.5cm, 横29.5cm, 高10.0cm
1937 (昭和12) 年 個人蔵

(6)「薔薇 ブローチ」(図16)

銀を素材としたブローチである。花卉の端が外側に丸まっている様子が、巧みに表現されてい

る。葉の部分には金メッキが施されている。



図16 「薔薇 ブローチ」縦2.5cm, 横3.8cm 個人蔵

(7)「飛魚 釵」(図17)

銀を素材とした帯留である。鰭の部分には、アール・デコ様式に特有の直線やシンプルな曲線が見られる。全体に鍍目が施されており、生命感に溢れている。



図17 「飛魚 釵」縦4.6cm, 横7.8cm 個人蔵

(8)「香盆 夕月」(図18・図19)

本作は、真鍮を素材とし、竹の輪郭は滑剝鑿で太い線が打ち込まれ、葉脈は蹴彫で表現されている。また、Y字型の特殊な鑿で隙間を埋め尽くすことによって、奥行き感を出している。仕上げには、月を金メッキ、それ以外の箇所には硫化着色を施すことにより、月光によって浮かび上がる竹林が詩情豊かに表されている。



図18 「香盆 夕月」
縦21.0cm, 横23.3cm, 高1.5cm 個人蔵



図19 「同」部分

4 鍛金による作品

建夫は、金鍍で金属を打ち延ばして立体物を成形する鍛金の技法にも優れ、以下の作品を制作した。

(1)「武人像」(図20・図21)

甲冑に身を固め、大刀を持つ古墳時代の武人が、鍛金・彫金の技法により精巧に表現されている。後頭部を保護する鍔や沓、刀等に金メッキが

施されている。武人の顔付きは穏やかである。時代を象徴するモチーフであることと、左沓底に刻まれた銘が「蛾文 鉢」のもの（図43）と同形であることから、昭和初期の作と思われる。



図20 「武人像」
縦7.0cm, 横11.5cm, 高19.0cm 個人蔵



図21 「同」後面

(2)「牛頭」(図22・図23)

本作は、当金を用いて銀の板を絞ることにより、牛の頭部を成形したものである。髪等の細部は、内側に溶かした松脂を詰め、鑿を用いて加工した。なお、角は最後に接合しており、裏面には、壁に掛けるための溝がある。



図22 「牛頭」縦13.0cm, 横14.0cm, 高5.7cm
個人蔵



図23 「同」裏面

(3)「武蔵野」(図24・図25)

器は、回転体の絞り技法によって成形され、側

面には、大きな上弦の月が、黒地に金メッキで表現されている。一方、蓋の部分には、打ち出しによる1羽の兎が、銀で表されている。第3回日本新工芸展（日本新工芸家連盟主催、1981〈昭和56〉年6月5日〈金〉～10日〈水〉、東急百貨店本店）の出陳作である。



図24 「武蔵野」縦20.0cm, 横20.0cm, 高17.0cm
1981（昭和56）年 個人蔵

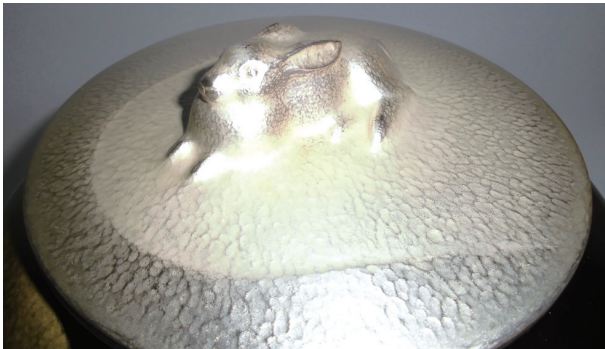


図25 「同」部分

5 鑄金による作品

（1）「龍」（図26）

蠟型鑄造による作品である。

本作は、東洋の伝統的な龍の姿とは異なり、体長は短く、体表に鱗はなく、角は1本である。



図26 「龍」縦10.0cm, 横29.0cm, 高18.8cm
個人蔵

（2）「飛天」（図27）

本作は、薬師寺東塔の最上部を飾る水煙の、横笛を吹く飛天から想を得たと思われる。風にたなびく衣が美しい。



図27 「飛天」縦12.9cm, 横15.0cm 個人蔵

6 パブリック・アート

1970年代以降、彼は公共空間に設置する巨大な作品を手掛けた。

(1) 「鳥の詩」(図28・図29)

本作は、三橋国民・越智健三と共に原型を制作し、竹中銅器(本社・富山県高岡市)が铸造し、日本鋼管によって三重県津市に寄贈された。葉のない樹木に止まる多数の鳥がダイナミックに表現されている。

その他、1974(昭和49)年に三橋・越智・川添智利と共に制作したレリーフ「燦」(縦360.0cm, 横1160.0cm)が山陽新幹線開通に伴い新装となった福山駅に設置された(日本鋼管寄贈)。本作は、燦然と輝く太陽、羽ばたく鳩の群れ、点在する島々、煌く瀬戸内の海によって限らない躍進と平和の喜びが表現されている。



図28 「鳥の詩」縦180.0cm, 横470.0cm, 高220.0cm
1980(昭和55)年 三重県津市役所中庭



図29 「同」部分

7 デザイン及び原型制作に携わった作品

建夫は、鋳金やプレス加工の技術を活用して、多くの人々に行き渡る作品を手掛けた。

(1) 「大黒天」(図30)

建夫は、兄・浩太郎が清水建設の常務取締役であったこともあり、同社に関わる作品を数多く制作した。

本作は、1804(文化1)年に清水建設の創業者・初代清水喜助(1783〈天明3〉年~1859〈安政6〉年)が手彫りした木像(清水宗家蔵)を建夫が模したものであり、東京・京橋の白金が製造した。



図30 「大黒天」
縦4.9cm, 横6.3cm, 高8.1cm 個人蔵

(2) 「墨壺 文鎮」(図31)

初代清水喜助は、1798(寛政10)年から12年間、日光東照宮の修理工事に参加した。これが縁で、1928(昭和3)年、清水家は幕府作事方大棟梁を務めた甲良豊後守宗廣の末裔より上棟祭用の

大工道具を譲り受けた。本作は、清水建設創業150年記念として、その中の墨壺を建夫が模したものであり、精巧に作られている。



図31 「墨壺 文鎮」縦12.0cm, 横5.9cm, 高3.0cm
1953 (昭和28) 年 個人蔵

(3) 「清水建設本社増改築竣工記念 文鎮」
(図32)

本作は、増改築された清水建設本社ビルが浮き彫りで表現された文鎮であり、建夫は、デザイン及び原型を手掛けた。



図32 「清水建設本社増改築竣工記念 文鎮」
縦5.8cm, 横6.0cm, 高1.7cm 1960 (昭和35) 年 個人蔵

(4) 「日本規格協会竣工記念 文鎮」(図33)

本作は、日本規格協会ビルがレリーフで表現された文鎮であり、建夫は、デザイン及び原型を手掛けた。

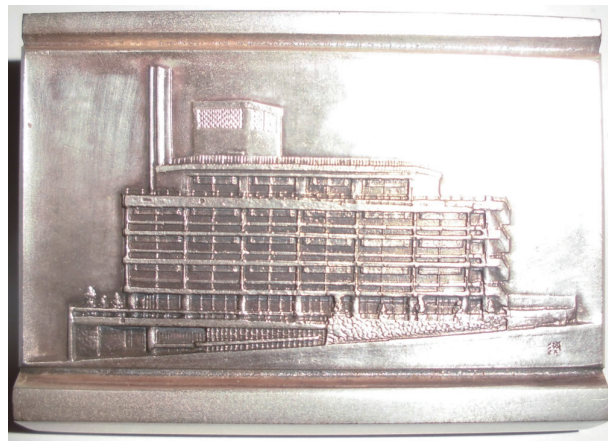


図33 「日本規格協会竣工記念 文鎮」
縦4.8cm, 横6.7cm, 高2.0cm 1962 (昭和37) 年 個人蔵

(5) 「柱頭 小物入」(図34)

本作は、清水建設創業160年記念として建夫が制作した小物入である。1874 (明治7) 年、2代清水喜助清矩の建築による駿河町三井組の正面ベランダの柱頭を模したものであり、原品は清水建設に所蔵されている。



図34 「柱頭 小物入」縦8.0cm, 横8.0cm, 高7.0cm
1963 (昭和38) 年 個人蔵

(6)「清水建設株式会社優良施工表彰牌」(図35)

円形の中に、清水建設本社ビルが浮き彫りで表現されている。



図35 「清水建設株式会社優良施工表彰牌」
縦6.0cm, 横6.0cm 1964(昭和39)年 個人蔵

(7)「日本経営者団体連盟創立20周年記念牌」
(図36)

本作は、建夫が原型を制作し、東京美術学校で2代美盛に師事した佐藤省吾(号・美崇, 1885〈明治18〉年～1983〈昭和58〉年)が縮刻したものである。

図案は、日本経営者団体連盟が創立されてから20周年を迎えるまで、波乱に満ち、また幾多の困難に逢着しながら、これを乗り越えて日本経済の再建発展に寄与し、さらに将来に対する希望を山々と太陽によって表象したものである。



図36 「日本経営者団体連盟創立20周年記念牌」
縦7.5cm, 横7.5cm 1968(昭和43)年 個人蔵

(8)「亀 文鎮」(図37)

本作は、第23回広告電通賞の記念品として、建夫が原型を制作し、和光が製造したものである。



図37 「亀 文鎮」縦6.0cm, 横4.5cm, 高2.2cm
1970(昭和45)年 個人蔵

(9)「沖縄復帰記念 メダル」(図38・図39)

本作には、自由と平和への願いが込められており、建夫は原型を制作した。なお、材質は純銀であり、デザインは玉那覇正吉(琉球大学教授, 1918〈大正7〉年～1984〈昭和59〉年), 製造は沖縄宝石貴金属加工業協同組合が担当し、復帰記念メダル委員会が発行・発売した。



図38 「沖縄復帰記念 メダル」縦3.0cm, 横3.0cm
1972 (昭和47) 年 個人蔵



図39 「同」裏面

(10) 「花蝶 スプーン」(図40)

本作は、建夫がデザイン及び制作指導をし、白金貴金属店(京橋)が製造・販売したスプーンセットである。材質はスターリングシルバー(銀含有率:92.5%)であり、シンメトリーの愛らしいデザインである。



図40 「花蝶 スプーン」
各・縦11.2cm, 横2.2cm 個人蔵

(11) 「鴛鴦 盒子」(図41)

本作は、鴛鴦の雄をモチーフにした鍍金による器物であり、頭部が蓋になっている。



図41 「鴛鴦 盒子」
縦8.7cm, 横4.4cm, 高4.3cm 個人蔵

8 その他

建夫は、金属を素材とした作品以外に、書籍の装丁も手掛けた。

(1) 丹羽文雄、『愛慾』装丁(図42)

1947(昭和22)年5月12日に朝明書院より発行された本の表紙・背・裏表紙・内表紙であり、型染風の簡潔なデザインとなっている。

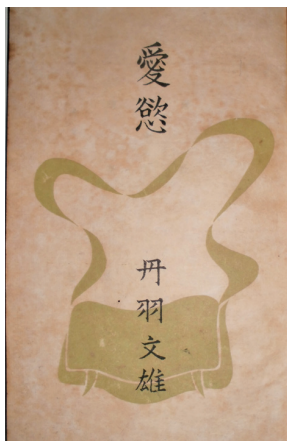


図42 丹羽文雄、『愛慾』装丁
1947（昭和22）年，朝明書院

IV 芸術振興の取り組み

1 オリンピック・ローマ大会芸術視察員として

近代オリンピックにおける建築・文学・音楽・絵画・写真・彫刻の芸術競技は、第5回ストックホルム大会（1912年）で導入され、第14回ロンドン大会（1948年）まで継続された。第15回ヘルシンキ大会（1952年）からは、大会に付随する芸術展示としての位置づけに変化したが、競技・展示の主題は、一貫してスポーツに限定されていた。

先述の通り、建夫は1960（昭和35）年に日本体育協会のオリンピック・ローマ大会芸術視察員として渡欧した。ローマ大会の芸術展示では、「歴史と芸術におけるスポーツ展」が開催され、古代ギリシャ・ローマの彫像作品を中心とした古典芸術が展示されたが、テーマはスポーツに限られていた。視察後、建夫は、「要は現代芸術を経とし

古代芸術を緯としたスポーツ芸術の大展覧会を開催し、両者相俟ったオリンピック芸術の正しい在り方を東京大会で具現することであり、芸術国として自他ともに任ずる日本が主催するオリンピック大会の意義をより大きく、より重からしめることにあると信じる。³⁾」との見解を示した。そして、第18回東京大会（1964〈昭和39〉年）では、主題をスポーツに限定せず、日本の古代から近代に至る一流の芸術を展示するという方針が新たに立てられ、大会期間を中心に美術部門4種目（古美術・近代美術・写真・切手）、芸能部門6種目（歌舞伎・文楽・雅楽・能楽・古典舞踊邦楽・民俗芸能）の展覧会や公演が開催された。

美術部門の主な催しは下記の通りである。

・「日本古美術展」1964（昭和39）年10月1日～11月10日，東京国立博物館

・「近代日本の名作」同年10月1日～11月8日，東京国立近代美術館

入場者は、前者が406,739人，後者が37,725人であり、日本が文化国家であることが対外的に示された。

なお、建夫は芸術とスポーツの結び付きを重視し、東京オリンピック大会芸術特別委員会幹事（1964〈昭和39〉年就任）の他、日本オリンピック委員・日本スポーツ芸術協会副会長等を歴任した。

2 茨城県における活動

年譜の通り、建夫自身は東京で誕生したが、祖父・盛寿（1834〈天保5〉年～1896〈明治29〉年）の出身地が水戸であることから、彼も茨城に対して愛郷心を抱いていた。そして、郷里における工芸の振興を目的として、1930（昭和5）年に波山・清等と共に茨城工芸会の設立に参画し、茨城工芸展覧会（1981〈昭和56〉年～茨城工芸美術展）に下記の通り出品を重ねた⁴⁾。

・第1回（1930〈昭和5〉年5月5日～12日，いはらき記念館，主催：茨城工芸会，後援：いはらき新聞社・茨城県商工課・同学務課・水戸商工会

議所)「黒味銅花盛」等7点を出品する。

・第2回(1932〈昭和7〉年5月7日～11日, いはらき記念館, 主催: 茨城工芸会・茨城県商工課, 後援: 茨城県学務課・いはらき新聞社)「香炉」・「置物」を出品し, 「山水爐」で県賞を受賞する。

・第4回(1936〈昭和11〉年5月9日～13日, 茨城会館)

・第5回(1938〈昭和13〉年6月17日～21日, いはらき記念館 移動展: 6月23日～25日, 日立市日立製作所諏訪台倶楽部/6月26日, 龍ヶ崎公会堂)「黒味銅花瓶」を出品する。

・第6回(1940〈昭和15〉年5月10日～14日, 水戸商工会議所) 出品に加え, 10日には磯崎美亜による金工実習を, 寺田龍雄(1904〈明治37〉年～1947〈昭和22〉年)・長島正親・大関勝盛・鈴木勝平・鈴木猛夫等と共に補佐する。 移動展: 5月15日～16日, 下館町役場公会堂(主催: 下館町商工会議所)

・第8回(1944〈昭和19〉年5月19日～23日, 茨城県商工経済会) 出品作「増産の賦額」を, 感謝と激励の意を表して茨城県内の工場に寄贈する。

・第10回(1946〈昭和21〉年8月1日～5日, 常陽銀行新館)

・第11回(1948〈昭和23〉年5月20日～24日, 茨城県商工会議所)

・第12回(1950〈昭和25〉年6月3日～7日, 茨城県商工会議所)

・第14回(1956〈昭和31〉年5月10日～14日, 水戸商工会館)

・第15回(1958〈昭和33〉年5月12日～16日, 水戸商工会議所)「勝利者」を出品する。

・第16回(1960〈昭和35〉年5月7日～11日, 水戸市商工ビル)「鳩をだく」を出品する。

・第17回(板谷波山90歳記念展, 1962〈昭和37〉年5月18日～22日, 志満津百貨店)

・第19回(1967〈昭和42〉年6月16日～21日, 志満津百貨店)

・第20回(1969〈昭和44〉年6月6日～11日, 志満津百貨店)

・第21回(1971〈昭和46〉年5月14日～19日, 志満津百貨店)「おしどり」を出品する。

・第22回(1973〈昭和48〉年6月8日～13日, 京成志満津) 第3代会長に就任する。

・第23回(1975〈昭和50〉年5月30日～6月4日, 水戸京成百貨店)「サーカス」・「木蔭」を出品する。

・第24回(1977〈昭和52〉年5月27日～6月1日, 水戸京成百貨店)「原野」を出品する。

・第25回(創立50年記念, 1979〈昭和54〉年5月11日～16日, 水戸京成百貨店)「雨来る」・「小笛」を出品する。

・第26回(1981〈昭和56〉年5月15日～20日, 水戸京成百貨店)

さらに, 彼は, 茨城県展(1966〈昭和41〉年～茨城県芸術祭美術展覧会)の中心メンバーとして活躍した⁵⁾。

・第1回(1948〈昭和23〉年11月3日～14日, 茨城県商工会議所(美術工芸), 主催: 茨城県・茨城県教育委員会・茨城新聞社) 板谷梅樹・桜井霞洞(1889〈明治22〉年～1951〈昭和26〉年)・介川芳秀(1898〈明治31〉年～1975〈昭和50〉年)と共に審査員を務める。

・第7回(1952〈昭和27〉年11月21日～25日〈後期〉, 茨城会館〈日本画・美術工芸〉) 板谷梅樹・介川芳秀と共に運営委員を務める。

・第4回茨城県芸術祭美術展覧会(1969〈昭和44〉年10月25日～11月3日〈第1期: 日本画・洋画・彫塑・美術工芸〉, 茨城県立県民文化センター, 主催: 茨城県・茨城県教育委員会・茨城文化団体連合・茨城県文化福祉事業団・茨城新聞社) 城戸夏男(1914〈大正3〉年～1999〈平成11〉年)・小倉絃梧(1917〈大正6〉年～1994〈平成6〉年)・富田末男(1885〈明治18〉年～1974〈昭和49〉年)と共に審査員を務める。

・昭和51年度茨城県芸術祭美術展覧会(1976〈昭和51〉年10月31日～11月14日〈第1期: 日本画・

洋画・彫塑・美術工芸〉、茨城県立県民文化センター）名誉会員として「野わけ」を出品する。
選抜移動展：下館市

・昭和53年度茨城県芸術祭美術展覧会（1978〈昭和53〉年10月29日～11月9日〈第2期：日本画・洋画・彫塑・美術工芸〉、茨城県立県民文化センター・県民福祉センター）「日月炉」を出品する。
選抜移動展：古河市

・昭和54年度茨城県芸術祭美術展覧会（1979〈昭和54〉年10月25日～11月3日〈第2期：洋画・彫塑・美術工芸・デザイン〉、茨城県立県民文化センター・サントピア〈～4日〉）「パンジー」を出品する。
選抜移動展：北茨城市・下館市

・昭和55年度茨城県芸術祭美術展覧会（1980〈昭和55〉年10月18日～29日〈第1期：洋画・彫刻・工芸美術〉、茨城県立県民文化センター）「瑞果」を出品する。
選抜移動展：那珂郡東海村・久慈郡大子町

・昭和56年度茨城県芸術祭美術展覧会（1981〈昭和56〉年10月21日～30日〈第2期：日本画・工芸美術・写真・デザイン〉、茨城県立県民文化センター）「孤愁」を出品する。
選抜移動展：麻生町公民館・筑南地方広域行政事務組合第2圏民センター

・昭和57年度茨城県芸術祭美術展覧会（1982〈昭和57〉年10月22日～31日〈第2期：日本画・工芸美術・写真・デザイン〉、茨城県立県民文化センター）「しじま」を出品する。
選抜移動展：11月13日～20日、取手市福社会館

以上のように、建夫は自身の制作のみならず、地域の展覧会を通して人々に工芸の魅力を伝え、将来を担う作家を育成し、芸術の振興に情熱を注いだ。

なお、両展は現在も続き、茨城県の芸術文化の発展に寄与している。

V 落款

ここでは、作品の真贋を見分ける際の参考となる建夫の落款を集成する。

1 刻銘

(1)「建夫」(図43)

「蛾文 鉢」(図15)の底部に刻まれた楷書による銘である。



図43 「建夫」

(2)「建夫」(図44)

「飛魚 鉸」(図17)の側面に彫られた草書による銘である。



図44 「建夫」

(3)「建夫鑑造」(図45)

「不二越の龍」(図2・図3)の銘であり、「建」が草書で表現されている。



図45 「建夫鑑造」

(4) 「海野建夫模」(図46)

「大黒天」(図30)の底部に打たれた篆書による銘である。



図46 「海野建夫模」

(5) 「Tak」(図47)

「黄金虫 鉸」(図12)に彫られたローマ字表記の銘である。



図47 「Tak」

2 印銘

(1) 「建」(図48)

「武蔵野」(図24・図25)に刻まれた印であり、篆書を基にしている。



図48 「建」

(2) 「建」(図49)

「裏街 フィレンツェにて」(図6・図7)の印銘であり、四角形の中に篆書の「建」が配されている。



図49 「建」

3 箱書

(1)「昭和四年冬 建夫 印海野」(図50)

「葡萄狩 鏡」(図11)の落款であり、楷書で記されている。



図50 「昭和四年冬 建夫 印海野」

(2)「昭和十一年吉祥 建夫作 印海野」(図51)

「黄金虫 鉸」(図12)の箱書である。

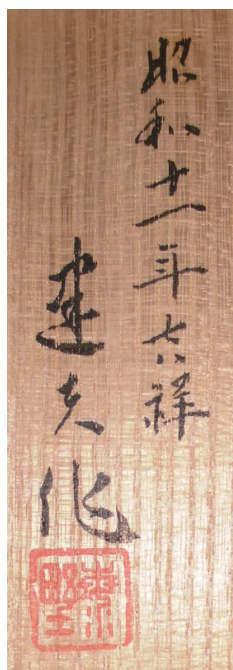


図51 「昭和十一年吉祥 建夫作 印海野」

(3)「昭和丁丑造 海野建夫 印海埜」(図52)

「蛾文 鉢」(図15)の共箱に見られる落款である。



図52 「昭和丁丑造 海野建夫 印海埜」

(4)「印海野之印」(図53)

「香盆 夕月」(図18・図19)の箱に押された印である。



図53 「印海野之印」

(5) 「印建」(図54)

「大黒天」(図30)の箱にある篆書の印である。

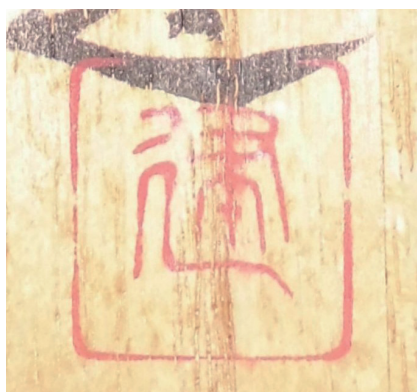


図54 「印建」

(6) 「印建」(図55)

「鴛鴦 盒子」(図41)の箱に押された印であり、篆書を基にしている。



図55 「印建」

VI まとめと今後の課題

本研究では、まず、年譜を作成することにより、建夫は帝展～新文展～日展を中心に精力的に作品を発表すると共に、さまざまな要職に就き、日本工芸界の指導的な役割を果たしたことが確認された。次に、多様な作品の発掘を通して、彼は伝統的な金工技術を基礎に置きながら、現代の生活様式を意識した作品、打ち出しレリーフに鍍金と箔彩を施した叙情性豊かな作品、鍛金や鑄金の技法を駆使した作品、公共空間に設置する巨大な作品を手掛ける等、幅広い創作を展開したことが分かった。続いて、オリンピック・ローマ大会芸

術視察員や茨城工芸会・茨城県展～茨城県芸術祭美術展覧会での活動を調査することにより、彼が日本の古今の芸術を国内外に広く紹介すると共に、地域の芸術振興に尽力したことが明らかとなった。最後に、彼の落款を集成することにより、作品の真贋を見分ける際の一助とした。

本研究を通して、改めて現代の工芸作家として表現の独自性を探究することの重要性を認識した。今後は、彼の教育者としての側面について探りたいと考える。

註

- 1) 中野政樹, 「日本美術を支える人 彫金 海野建夫」, 『芸術新潮 第13巻第9号』, 新潮社, 1962(昭和37)年, 132頁～135頁
- 2) 茨城県立美術博物館編, 『茨城の美術史』, 茨城県立美術博物館・茨城文化団体連合, 1972(昭和47)年, 485頁
- 3) 海野建夫, 「芸術」, 『第17回オリンピック競技大会報告書』, 日本体育協会, 1962(昭和37)年, 298頁～301頁
- 4) 茨城工芸会, 『茨城工芸会50年史』, 1985(昭和60)年を参照した。
- 5) 茨城県芸術祭実行委員会編, 『茨城県芸術祭の歴史—15年のあゆみ—』, 1981(昭和56)年／同編, 『茨城県芸術祭の歴史Ⅱ—16年から30年まで—』, 1996(平成8)年／茨城県芸術祭美術展覧会, 『令和4年度茨城県芸術祭美術展覧会』(出品目録), 2022(令和4)年を参照した。

※本稿掲載の図版は、すべて筆者の撮影による。

